

kuurenai

63

『くれなる』 通巻第六十三号昭和二十七年九月一日発行

埜中清市 歌集 既刊

(くれなる叢書第一篇)

天 雲

混沌の中に在つて孤獨十数年の風貌と人間味溢れる佳作三百三十余首を収録せる処女歌集である

A5変型 本文上質模造紙
厚表紙美装
函入 一三〇頁
定 價 二〇〇円

難波礼二 歌集 既刊

(くれなる叢書第三篇)

朝 鳥

若き日の情熱は、天地にも注がれてゆくのである。自然を愛する心はひたすらにしてしかも明確。愛人と結ばれたる日を記念する豪華処女歌集

A5変型 本文上質模造紙
美装カバー付特製本
九〇頁 定 價 一五〇円

右原 龍 詩集

岩

既に失望の一つの形式、乃至は自己反逆の岩として、この一書は上梓された。

A5大判、本文上質紙、
表紙鳥の子紙、カバー付
上製極美本 百部限定
定 價 二〇〇円 在庫僅少

爐 書 房

くれなる叢書續刊

第四篇

安田武夫 歌集

題 未 定 A5変型三〇〇首近刊
一三〇頁二〇〇円

第五篇

池田道夫 歌集

苦 行 林 A5半裁変三〇〇首近刊
二〇〇頁四近刊

奈良縣高市郡八木町二〇二
爐 書 房 刊 行

山口 實 歌集 既刊

(くれなる叢書第二篇)

長 崎

田中克己 序詩

過ぎし日の愛慾の遍歴に傷つた心が殉教者の運命のさびしさにも似て、ステインド・グラスの光の中にほのぼのと美しくも、悲しく、よみがへつて来るのであった。

A5変型、本文上質模造紙
函入、寫真一葉特製豪華本
一一〇頁 定 價 二〇〇円

この作家 田中克己

にぎりなき朝の光にあらはれて優しきものは生命みせつる

夕映えの光の中にいま見てし川のながれはひと色ならず

抒情も叙景も難波君のうたには眞率さがあふれてゐて、当世珍しい人柄をあらはしてゐると、よみかへしよみかへししてゐる中に、憲吉や千櫨を愛読してゐたおのが少年期もなつかしくなりました。

さて憲吉や千櫨とさちらがうまいだらう。文学史上の人となつた二大家にも劣らない作家なのではないだらうか。もしこれが当代の青少年を動かさないとしたら、作者の罪だらうか、時代のせいだらうか。若い歌人たちには私はいちごそれをきいて見たいと思ひます。

難波礼二歌集「朝鳥」
特 集 號

くれなる63印刷所株式会社朝日堂印刷者大阪市天王寺區上之宮町五六吉川仁造 発行所大阪市東成區大今里北之町五丁目二二一くれなる發行所

「朝鳥」の作者 埜中清市

清楚なる歌集「朝鳥」を世に問ひ得たことよるこびを幾たびか繰り返したいのはただ小生だけではない。

著者難波礼二君は未だ二十余才の若きに於てかくも絶大なる詩才を示し、諸賢の御聲援を添ふしたのである。

手堅い彼の手法は、地についた歩みは自らにして、高いひびきをもつてある。自然の懐にいだかれて、静かに生活する作者の前に、さらびやかに展開される地球運行の現実、彼の血を湧き立たしめ、現実への遠さと近さを自由自在に分別し然も偉大なる親しみをもち、自然の胸中を右往し、彼の腹中に自然を左往せしめて眼を細めてゐる彼。常に彼の傍にあつて、彼が對決する現実の流れを流れとし、光を光として肯んじてゐた戀人は、一山明るき中に結ばれたのである。彼が向ふ所常にはばかるものなく、彼をして唱はしめたる天地であつた。

○にこりなき朝の光にあらはれて優しきものは生命みせつる。

○はねつるべ上がりしままに寂びれたる野井戸は曼珠沙華の花に埋れぬ

○ほのほのと焔のごときあかり射し春の光は地にあふれけり

○夕映えの光の中にいま見てし川のながれはひといるならす

○手にとりて香ぐえる白き野茨の花も箱根は霧の匂へる
この自然に向けられた清純なる彼の眼の底には、聲にいだきぬかなしみがこみあげられてくる。

○くま笹の青をよぐ尾根をくだりつつ涙に暮れて恋ふはるけさを

○おとるへて花の過ぎたる朝顔が秋なれや朝け種をおとせり

○世の常の石に似つれどもみぢ葉につつまれてゐるつひの静けさ

○秋すてにふかくあら草穂にいでぬ川水ほそく砂をながれて

○青葉かげわが心さやにしゆりつとどまるところ神あますかも
この優しさであり愛しさは作者の性格を語つて余りあるのである。そして彼のあたかさと根強さも共に存すると見て過ちはない。さふいふ意味からして又別のうたひぶりが彼にはある。

○美しき乙女の胸のふくらみを見つ光の中に羞らふ

○星の光り大きくゆれてわがいのち何にあまへて祈らむとする

○手をたづさへ昏きをふみてゆく道に稚き月の光とよける

○いや冴えに密樹冬日に光るみて泪おとしぬ人に知らゆな
あどけないうたひぶりといへば

○月照れど街路樹くらき別れ道おやすみなさいおやすみなさい

かくも難波君は若いのであり、あどけない様な中に心のかげやきは失はれずにある。一種のあはれを感じさせるあどけなさであり、眞面目なユーモアがここから生れてくる。或ひはあまりにもあどけないと云はれるうたひぶりであるかも知れぬが、作者の位置が明確であり眞にせまるものあることは否定すべくもない。斯く平々凡々とうたひこなす中に美をみだし、光をみいだししてゆくのが短歌の本道であると信するが故に。

○ひたひたと氷雨音して降る夜の夢はひとつの尾を曳きて消ゆ

○また逢はむ日こそあらしめ夕せまる巷の風に君吹かせつる

○昨日と同じ日暮れとなりて來む明日に思ひ待まむものあらめや

○地の果ての炎夕雲見るほごに子らはせ來り我にならぶを
彼の人生は常に明るく、すべて意義あり、自らにしてひびきを放つ

○装ひを春に變へたる汝を見てこれでよしといふ安堵をいだく

○いつよりかわれの間隙に入りてあてしづかに水を飲む風あり

かふいふ情緒に彼は息づく。狭い世間に鬼もなければ争ひもない筈である。昔、大仁と呼ばれた人々の心の中はかくも平らかであつた。出世賣名にあせり紙幣の奴隷となり果てた人々の心とは、いささか遠いものがある。「筆のすさび」のまにまに書いておられる時代ではないけれども、黙つて筆をみがく同志が、もつとあつてよいのではなからうか。歌にも新風が吹き、門閥が巾をきかす時代である。幾度かそのあはれさに寒心させられる。やはり人間の弱さがあり、高慢が潜んでゐる。これは歌論にも何もならないがそんな世の中である。筆はすべつた様であるが、難波君のこの素直な歌をみつめながら、こんな事を考へさせられること切である。

難波君の歌には尙次の様な格調がある。これも今まで述べて來たことに通じるものではあるが

○いささかの隔りもちて生りたる何が何時迄も意識を去らず

○電車待つアカシヤのかげに身をひそめ昆虫のごとき吾が息づかひ

○ある時は偽善者ぶりに蜂の音ひかれる道に黙しあひつつ

等は作者の身稱へ一つで作者の影なるものをうたつたものである。更に述べたい事は数々ながら、失礼ながら、保田與重郎氏の評をかかげることにして、彼の姿を見極められんことを。

○古のゆかりの人を見わすれしこゝちに更に飛泉ながめぬ

これは面白い歌である。かういふかげりのやうな氣持の動きを歌ふことは、楽しいと思ふ。聞く方も一層たのしいのである。この飛泉は赤目の滝である。なほ

○いつの日もかかる思ひのあらなくに片寄り流る水はなぐらき

○もろもろの木の実はおほかた色焦げて自らなるものおほはしむ

○海水をふめばはりはり音をつたつたましき心ひらくる
もほゞさういふ心境を歌ひつ、作者の観念的な象徴への身振りのために、もう一つ深い心象上の興味が出てゐない。

○朝空のはてにかゞやう紅き雲いづれの水に光り映せる

これだと、小生の口吟にも耐へる佳作である。全く歌になつてゐる

○脱ぎ捨てしまゝの着物がそれぞれに影もつ朝はほがらに暗れぬ
これも成功の作である。この作者は微妙な、人しれぬところに、獨自さをもつてゐる。心がけて歌の世界の広さを自得したなら、十分自身の個性を自負し伸長せしめ得るだらう。

○ふる里の父母おもへばうす暗く涙のごとき人のはしれる

こんな醇な心をもつた人である。悪ざいところがこゝにはない

○雑草の根ごとに抜けばそここゝに光りをさけて走る虫あり

これも歌になつてゐる。なほとりたてて云ふものではないが、こゝの「光をさけて、走る虫あり」の観念化をすてて、たゞ虫走りけりとして去る心の方を、小生は好ましくするのである。それは観念を捨てるのであるが、同時に自他一體化、あるひは観念への自己投企である。この観念への徹底的無條件降服は必ず、高度な聖なる立場をきつき、對手を絶體的な空に歸せしめるだらう。

朝鳥に寄す

(五十音順)

赤木 健介

○ 歌集「朝鳥」御惠贈下され、ありがたく御礼申上げます。おちついた青春の感觸を紙面からうけとり、ころよい思ひなしました。すでに一家をなした才能を、さらに人生の深处に向けてゆかれんことをのりませ。御存知ないかもしれませんが、小生姫高(旧制)の出身にて、西播には縁故深きものがあります。いつか、お目にかかれるときもあるうかと思ひます。御精進をいのりませ。

○ 浅野 梨郷

拜啓

このたび御歌集「朝鳥」立派に御装釘御発行小生へまでも御惠賜はりまして忝けなく拜見させて頂きました。御厚志ありがたく感謝いたします。

人生の旅路を歌を友とし乍ら歩くことの愉快は知る人ぞ知る。これを体験したるもの、よるこび例へかたなきものがあります。御歌の一つ一つに表はれたる心の清韻をた

へつ、御歌集を拜讀いたしてをります。

御装釘の美事さもこれに應じてなつかしくいゝ紀念と存じます。

とりあへず右御礼のみ申上げます。益々御精進を期待いたします。勿々

○ 朝日新聞大阪本社

拜啓

歌集 朝鳥

御寄贈にあすかり御芳情のほどありがたく御礼申し上げます。感謝とともに永く保存し新聞編集その他の参考資料に致します。御隆盛を祈ります。

敬具

○ アララギ発行所

拜啓

御新著「朝鳥」御惠送下され忝く存じます。熟讀御教示を得る機を持ちたく存じてをります。取敢へず御禮の言葉申述べます。勿々

○ 池田 克己

御高著「朝鳥」有難うございました。若年にしてすでにかゝる渾然たる歌境を開拓された

御資性に深い敬意を捧げます。

「闇に影ある眞夜は深みぬ」といつた卓抜新鮮な表現至るところに見え、感銘しています。取敢ず御礼まで。

○ 今中 楓 溪

いよ、梅雨明の氣配にて候。御壯康且御躍進御精進祝着千萬にて候。

高著朝鳥御上梓御勞苦の珠玉の結晶御満足の御事と拜察心から御祝申上候。早々御惠贈に預り御懇情拜謝ゆる、拜讀相樂しみ申候。不取敢御厚礼まで。

○ 草々 不一

石川 信 雄

御歌集「朝鳥」ありがたく頂きました。ゆつくり拜見してから感想申上げ度く、とりあへず拜受の御礼申します。小生も秋から、石川信雄作品集として歌集三巻文集三巻續けて出したと思つてゐます。……今秋あたりは久振に関西にもまゐりたいと思つてゐます。

○ 植松 壽 樹

拜啓 御健勝大慶に存じます。過日は難波渡二氏の歌集「朝鳥」御惠送にあづかり誠にありがたく拜受いたしました。いづれ沃野誌上にて御紹介申したく不取敢御礼のみ申述べま

す。難波氏の御住所不明のまま、御挨拶も申しかねて居ります。よろしく御厚聲願上げます。

○ 扇 畑 忠 雄

本日貴歌集「朝鳥」御惠贈たまわりましてまことにありがたく存上げます。出版事情の困難な折から立派な御本として御上梓のこと心からお祝ひ申上げます。調子徹り感動の沈潜した御歌多く、ゆつくり拜讀させていたゞくとを何よりのたのしみとして、とりあえず御禮まで申上げます。東北地方栗の花ようやく終り梅雨明けに近づいています。くれぐれも御大事に。

○ 岡 山 巖

御高著朝鳥御惠贈たまはりまして誠にありがたく存じました。

お立派な出来栄、活字の大きさも誠に心地よく拜讀致しなります。何れ拙誌上にて御紹介申上げたたく存じなりましたが取急ぎましてお禮申上げ、御上梓お祝ひ申上げます。

○ 尾 崎 孝 子

御歌集朝鳥御惠送ありがたく存じました。くれなる、日本歌人にてお作品は拜見して居りましたが、まとまりました作品は、ゆつくり

心を落ちつかせて拜見いたしたく存じます。

後啓

○ 小田 切 秀 雄

新著「朝鳥」落掌いたしました。本日拜見しました。はじめの方が技法上はととのつていらが、わたしとしては後半の方の作者がいららと揺れうごいてる姿の方にかえつて共感を感じました。それをもつと荒々しく進められることを期待いたします。

○ 川 田 順

貴歌集朝鳥一卷忝く拜受致候。まだ二十四、五歳といふお若さにて、これだけ、歌にソツ無く粒揃ひ、且ツ新鮮にして感情デリケート深く感服いたし候。たゆまず御精進を祈上候

○ 北見 志 保 子

御立派な御歌集「朝鳥」をおあみになりました。御目出たう存じます。今度は私にも御惠贈いたゞきありがたく厚くお礼申上ます。中々面白いお歌多くいま半分ほど拜見いたしました。とりあへず御礼まで

○ 木 俣 修

御高著歌集「朝鳥」本日いただきました。若くしてからした美しい和歌集を編まれたことは意義の深いものと思ひます。切御精進の

ほどをいのりませ。

まづは拜受御禮まで

○ 不 一

近 藤 芳 美

歌集「朝鳥」いただき厚く御礼申上げます。梅雨、いつまでも長うございます。御さはりはございせんか、このたびは、御歌集朝鳥御出版御よろこび申上げます。私にまで御送り下さいまして、おそれ入りました。ゆつくりはい見を致します。二十代の記念歌集、年と共に、厚みが加はつて参りませう。とりあへず、御禮まで。

○ 齋 藤 茂 吉

御歌集「朝鳥」御惠送にあづかり忝く御禮申上げます。御自愛專一に御健勝のほご祈上げます。

○ 頓 首

佐 佐 木 信 綱

山庭は今花々うつくしく候うるはしき御集御贈り下され謝上候。御うたなる天平の雲なつかしく候。大和へも久しくまゐらず前川君にもしげらくあひ申さす候。略書失禮に候へどとりあへず御礼、御請まで

○ 草 々

清 水 千 代

御歌集「朝鳥」御惠送にあづかり御礼申上げ

ます。かはつた形の御本でまづ印象づけられます。御題名とても感じがよろしいですね。これからぼつ／＼讀ませて頂きます。後畧

○ 壽岳文章

御惠贈の「朝鳥」拜讀いたしました。東播ではありますが、やはり栗賀村によく似てゐるであらう山村に生れて少年時代を送つた小生には、さう言ふ風土感をもつ歌が無條件にこのもしくうけとれます。たとへば、「山の間の青葉かげ」道白く、「巷の風」の「二十年」など。惣じてあなたの歌には、奇矯なてらいがなく、自分の姿であれ、対象であれ、よく見つめてゐる点が小生の共感をひきます。茂吉を讀む歌一首を見出で、なるほどと思ひました。

前川君の歌境につながるの多いグループであっても、勉強としては、利玄や茂吉を讀まれることは望ましいと思ひます。他に小生の好きな歌「曉の光」の「朝雲」は「広庭」に「こりなき」、「湯の音」の「手にとりて」（但し「香ぐへる」の語法、少し氣にかゝる）、「殘光」の「ここにして」とほつ世の、「花散る時」の「透明に」など。讀過の時氣づいた誤植を左に

三〇頁「曉の」の「なりてける聲」は「なりし鳴ける聲」?

四四頁「華つたひの越へ」は「越え」

五一頁「春の來て」の「木の芽」は「木の芽」

六三頁「息冷ゆる」の「孤」は「孤」

六七頁「よみがへる」の「悔ひ」は「悔い」とりいそぎ御禮まで。

○ 高田浪吉

拜啓、この度、貴著「朝鳥」御惠送にあづかり御禮申し上げます。いづれ川波誌上で御紹介申し上げます。 敬具

○ 高橋新吉

拜啓 本日は美しき装幀の御歌集朝鳥御惠送にあづかりあつく御禮申し上げます。前々塾中氏の天雲を拜見しましたが、そのうちゆつくり拜讀いたしたいと思つて居ります。朝鳥のさわやかなうたひぶりを私も学びたいと思つてゐる者です。先は御禮まで。 草々

○ 高浜虚子

歌集「朝鳥」惠送を得、有難く存じます。歌の方は門外漢ですが、耽讀致さうと思つてあります。

○ 田口白汀

御高著朝鳥目出度く御上梓御欣び申し上げます

その上小生に迄一本を御惠送に預り、御厚志ありがたく御禮申し上げます。

じつくりと大地に根をおろした御作風に接し洵に力強く感じましたと共に新しい對象の把握方法に付教へられるところ大きく感銘致して居ります。ごうか今後共益々この道に御精進の程祈り申し上げます。

右御禮迄 草々 田中克己

○ 田中克己

拜啓 先達て御來阪の節は失禮いたしましたこの度御歌集朝鳥御出版御惠贈を賜り深謝申し上げます。山口君の歌集に多かつた誤植が見付かりませんのを大變うれしく思ひます。内容についてはいづれ「くれなる」の記念号でもくはしく思ひますが、おちついた地味な歌ひ方で、しかもこの時代の歌調が出てゐるのをありがたひに思ひます。憲吉や千燈を愛誦したわが若き日を思ひ出させるまじめな考深い著者に文学史的な感銘をおぼえたのは不勉強私の思ひすこしてせうか、ひたすらとなりて歌よむ友ごちの頭上にさすは何の光ぞ

○ 谷川徹三

御新著御惠送に預り厚く御禮申し上げます。

○ 土岐善磨

御歌集「朝鳥」を頂きありがたくぞんじますとりあへず御禮まで。

○ 日本短歌社

拜啓 御筆硯愈々御清健賀上げます。

扱て本日は御高著歌集朝鳥を御贈り戴きました有難う御座居ました。御立派に御刊行になりましたして御慶び申上げて居ります。何れ後程ゆつくり拜讀させて戴き度いと存じますが、本日は不取敢御刊行の御慶びと御贈り下さいました御禮を申し上げます。 敬具

○ 中野菊夫

御著朝鳥御惠送にあづかりありがたう存じます。早速に拜見いたしました。僕などがあなた位の年齢には、さてもこれだけは歌へなかつたと思つたりしてをります。近く中国地方へまありますので奈良へよれたらより、前川さんともお話をしたいと思つてゐます。とりあへず御禮のみ。

○ 日比野道男

歌集「朝鳥」の御出版を衷心より御祝ひ申し上げます。小生に迄御惠贈いただき御厚志深謝いたします。清新な御歌風、豊かな詩藻、まこ

とに羨しく拜誦してゐます。とりあへず御禮御挨拶まで

○ 久松潜一

拜啓 お暑さの折から御機嫌よく御過し遊ばされます御事と存じ上げます。さて只今は、御歌集「朝鳥」を御惠贈たまはりまして誠に有り難く厚く御禮申し上げます。後略

○ 堀内民一

御歌集朝鳥御惠送下されありがたく御禮申し上げます。日本歌人の若き世代の佳き作家として、つれに注意されつつある貴下の詩業がますます進展することを念じつつたのしんで拜見いたしたいと存じます。このあひだ城崎日和山の日本海の光景を賞しました。御禮迄申し上げます。

○ 前川佐美雄

拜啓 やつと霖雨もあがつたやうです。今日はお歌集お送り下さつてありがたく存じました。これはこれとして大いに勉強して下さい後畧

○ 見原文月

拜啓 お歌集朝鳥御出版お目出度う存じます。本日私へも御惠贈を頂きありがたく御受いた

しました。お禮申し上げます。

○ 矢代東村宅

今年はいつまでも梅雨がございまして、ほんとうつとしようございます。御立派な歌集朝鳥をいただきまして有りがたく御禮申し上げます。主人は上顎癌のため昨年末より国立病院に入院加療中でございますので代筆にて御禮申し上げます。病床にてゆる／＼拜讀させていただきます。先は御禮まで。

○ 安田青風

御高著歌集「朝鳥」御惠贈下さいますして有難く厚く御禮申し上げます。大へん氣持のいい御装幀でゆつくり拜讀させて戴く事をたのしみいたしました。中畧。いづれ白珠誌上にも御紹介させ度く存じをります。御上阪等の御機會には御立寄下さい。とりあへず御禮のみ。 草々

○ 山内義雄

御高著「朝鳥」ありがたく御禮申し上げます。「この春にかくる願ひのかなしもよ」「また逢はむ日こそあらしめ夕せまる」など卒讀の際、目にふれた二三の御作品にも心に近きものを感じゆつくり全篇拜見をたのしみに致

して居ります。

山口 茂吉

拜啓 このたび御高著歌集「朝鳥」御惠贈たまはり御芳情まことにありがたく、御受いたしました。

右不取敢厚く御禮申上げる次第でございます

敬具

山下秀之助

御著歌集「朝鳥」御惠贈下され有りがたう存じました。B6版ばやりの型を破つた装釘を珍しく思ひました。

若い御年令に似ず落ちついた潤みのある歌風に好感を持ちながらも少しアンビシラスな所もあつて良いのぢやないかといふ氣もしました。「原始林」で御紹介申上げたと思ひます取敢ず御礼まで。

山下 陸奥

「朝鳥」拜受いたしました。誠に美しい歌集にて、内容も清新なものにて驚きつつ拜讀しました。いづれ誌上で紹介します。

とりあへず御礼のみ。

山本友一

御著「朝鳥」御惠送賜りまことにありがたう御座いました。私は二十台の方でかうした格

調をもつ歌を詠む事を知らずにあましたので

おどろきを新にして拜見しました。私には私

なりの言ひ分がありますが、著者はやはり自分の信する道をひそすぢにやり遂げる事が第一だと信じます。前川さんなども世評などにおかまひなしにやつて來られた方です。何卒御自愛を重れられまして次々と飛躍し御業績を御見せ下さいませに。

とりあへず右御禮まで申し上げます。

草々

安田 武夫

謹啓 塾中清市君から貴兄の歌集「朝鳥」をいたゞきました。いつも「くれなゐ」を通じ貴作に接して居りますが歌集として手にとり讀ましていたゞくと、又言ひしれぬ味があります。ゆつくり讀ましていたゞきたく思つて居ります

謹啓

いづれ又小生の歌集も見ていたゞく折が來ると思ひますが、兎に角今後いろ／＼な意味で御友情賜りたく改めて御願ひ致します。

又お目にかかり御祝辞も述べさしていたゞきたく思つて居ります。先づは歌集の御礼等々

今後の御友誼御願ひいたしおきます。益々御精進あらん事を。

米田 雄郎

御著「朝鳥」たしかにありがたう。私の「好日」にいづれ紹介いたします。先は御礼まで。

寺田 透

歌集朝鳥大分前頂戴してゐながらお禮申上げすにをり失礼致しました。やうやく拜見のいとまを得ましたので讀後感若干お礼の意を兼

貴著「朝鳥」に好評多からんことを、また一層の御精進を御期得申し上げます。 勿々

「龍燈」ならびに「爐」誌上に御紹介をいた

だきましたこと、誌上をもつて厚く御禮申し

上げます。

先般「天雲」出版に際し、親しく書状を頂戴

しました左記諸氏に對し深く御礼申し上げます。

御芳名を掲げまして敬意を表します。

會津 八一(敬稱略)

岡山 嚴

古谷 綱武

寺田 透

日高 てる

滝島 彰司(毎日新聞社)

慶應義塾図書館

日本短歌社

金森徳次郎

誤字訂正

第六二号、八頁山岸外史氏の文章中、中段二

十一行の

「自分がいま、左翼に属して……」とあるは

「……左翼に屬して……」の誤りですから訂正

致します。

池田 道夫

どうもとんだことで大兄におわびの言葉もな

いのですが、實は貴著朝鳥御惠贈を受けた夜

を濫用しすぎやしないでせうか。 妄言多謝

日本歌人クラブ主事

呼子 丈太郎

御歌集「朝鳥」御出版に当り一部御惠贈いた

ゞき厚く御礼申し上げます。

関西歌壇は多士濟々にて賑々しいものが見ら

れますが、中でも若い作家の純直にして佳作

を発表されることは心強いものを覺えます。

早速御礼の御手紙書いて、明るる日、教へて

いる子供に出しておけと渡しておいたら、い

まころになつて、先生あの手紙ドブの中へ落

してしまひました。かんべんしてといつて來

た。どうも大兄にバツがわるくて誠に恐れ入

つています。さぞが失礼なやつと御怒りの

事と存じますが、何とぞ平におゆるし下さい

そんなわけで、其後何度も拜讀させていた

いて兄の高風に感伏しています。

小生ほとんど一年間、門を閉してシミのつい

た本ばかりありまわつてモグラのやうな生

活をしています。近頃やつと歌を作らうと

いふ氣持が出て來ました。

猶しばし妻と呼ぶむがおしければ構へごととして我はよろこぶ
君と我に何事もなければ天地にも足らぬ時すぎゆく思ひす
ひと目の終りしろき時間なり君が柵に置く人形をみいでぬ
まつ毛にもしばしば雪のふきたまる山ぞひの道また曲りたり
あかるさのほ残りぬる雲みえて鳴き上りゆく夕雲雀あり
夕空に雲あかあかとそまれるを玻璃戸の中に見つつ寒けし
冴えかへる如月の陽のかたぶきて光り静けし青竹の幹
はけしかる吹雪のしばし晴れゆけばこととしもなし山の木立
は

山口 実

目の前におかれたる黒き椀の中の抹茶の青き色をすがしむ
暗く重たき君の小説の完結を心にもちて今日旅立たむ

富士の山氣 埜中 清市

大富士の頂ちかくわが立てば雲海は動かざるに似て動きけり
雲海を抜きて立ちあがるたそがれの犬入道雲かがやきて見ゆ
聳だてる富士はわが山とりめぐる雲波立ちておぎろなきかも
延びてゆく富士の倒影目守りつつ暮るるを知らに立ちつくし
けり

冷え冷えと山氣のこむる一万尺の富士のお山に眠らむとする
身動きもならぬ雑魚寝にいつしかも眠りにけらし山も眠れば

調子よき音頭につれて老ひ人も腰をかぐめて踊りつづけぬ
夏の夜のをごりは果てぬあはれなる歌きえゆきし星きよき空

ひまわり 難波 敏子

ゆらゆらと夏の日射の燃ゆる時ひまわりは金の花粉を散らす
淳一のひまわりの繪の早乙女が歩き出そうな季節となりぬ
梅雨あがり庭のひまわり丈だかに東に南に咲く朝となる
ひまわりの花金色に咲きにけりひとつは高く一つは低く
君が言ひたまもりつつたそがれのあかき太陽みてかなしめる
紅き花黄色なる花むらさきのはな咲きにはふ秋のわがにわ
一念に君戀ふころふかみつ朝のはなばなみつめて立てり

病 床 平田 信子

何げなくいひし言葉がこの朝の清しさを毀す悔ひとなりぬつ
知り合ひの老醫師なれば安らかに胸をひろげて診てもらふな
り
長き日を倦み果てたれば病床に實現もせぬ夢など描く
みじろげば冷やし枕の水鳴りぬほつと小さく溜息をする
青き葉の匂ひ含める夕風が部屋わたる時よみがへりつつ
人の心の醜きばかり思はれて病の床にたちくらみする
病癒え久にし合ひて人みなのおたかき心に泣かれけるかな
人みな言葉もあやにやさしけれ心素直に昏れしひと日ぞ

星は冴え弦月白くかかりたり富士は寒けき夜に聳だちて
寶永山のま黒きかげに生きものの息づかひさへおぼえにけら
し
頂のあかき光は近しもよ星ふる夜半にまたねむるべし
灰にまみれし富士行者かも雲うごく頂ちかきねむり深けれ

東海紀行 安田 武夫

日ざし白し淵瀬にあそぶ子ら多しまではだかになりてたはむれ
てあり(天龍川)

かくばかりはげしき夏の汽車ぬちにたゞに思ほゆ袋井の友
一すじに只信仰に生きし人の故郷なりけり袋井の町
かの家に今尙住みて彼の妻の何をなすらん夫なきあとに
袋井の里を通れば彼の人と寝ねし旅路のつれづれ思ふ
今は亡き人の歌集を手にもちて眼閉じつゝ口吟みたり
ひときは明るき川に立寄りて釣する人の並び立ちたり
言葉少なき師とむき合つて酒交はず窓の下邊に秋虫鳴けり
最良の事願いつゝその事をなし遂げん日の幸恵へり
品川の灯美しくならびたり夜ふけて交はず言葉ひそまり

盆おどり 柴田 治枝

暮れぬまに集りきたるうら若き踊り子のさまげざやかにして
音頭にあはせてはやす踊り子の手拍子からくくびく星の夜
手拍子をそろへて囃す若きらの汗はひかれりうすきあかりに

すこやかに昏れたり明日もかくあれと満ちくるものに眼をと
する
熱ばみし病癒ゆれば化粧する女のならひかなしと思へり

くれなる雑記

ここに「くれなる叢書」として「天雲」「長崎」「朝鳥」三巻の上梓
を見た。出版の度に各位の御聲援を忝ふしたことは感激の外ない。こ
の御聲援に報いるべく同人一同精進を續けたい。あと二冊が豫定され
てあることを附け加へる。

「朝鳥」の特集號が「長崎」の先に出るのは理由なきことである。
御了承を乞ふ。

作品は都合により少くした故引續き普通號を出すから未提出の方は
早急に。